



たまごの

第152号

令和6年3月1日発行

発行所／一般社団法人
長崎大学玉園同窓会
〒850-0029
長崎市八百屋町36番地
TEL 095-824-5494発行人／藤木 卓
印刷／株式会社 岩永印刷所

巻頭言 ～ 慈愛のひと～

去る10月に亡くなられた玉園同窓会前会長の濱崎嘉一郎先生、先生は慈愛の人であった。

ご縁を得て、若い時分から何かとお声をかけていただいた。行きつけの小体な店では、杯を重ねるほどにお声の響きが広がり、カセットのカラオケに興じられた。勤務を同じくすることはなかったが、お会いしてはがんばれ、がんばれと大きな掌で肩や背中に励ましをいただいた。ゆるりと包み込まれ、心地よかった。

慈愛の人と言えば、ひとりの校長先生を思う。これも若い時分のこと。子どもたちの問題行動が毎日のように起こったあのことである。

この先生の慈愛は、慈しみや愛しさのそれとは違う。人を放さない、人を決してあきらめないこと、その姿に私は慈愛なるものを感じた。子どもを説諭するときは、両の手首をつかんで、肩を揺さぶってその子を放さない。腕を振りほどいて立ち去るのを追いかけて、追いつき、また目の前に立つ。その子を決してあきらめないのだ。

問題行動が繰り返され、私なぞの若い教師が匙を投げつつあった子どもに対しても、あきらめの姿をついぞ見ることはなかった。見放された、見限られたと敏感に感じ取った子どもが、その教師のところに戻ることはない。「来るな、放せ」とわめく子どもも、その様子を周りで見ている子どもたちも、この先生には自分をつなぎとめてくれるものを感じていたと思う。しばらくの時を経て、そう思うようになった。

こんな出来事があった。

私が新任教頭として異動することが新聞に載った、その数日後のこと。この校長先生から一枚のはがきが届く。70をとうに過ぎておられるそのペン使いはたどたどしく、それだけでじわりと湧き上がってくるものがあった。昇任祝いの言葉に続けて、勤務していた長崎市教委での私の仕事のことが事細かく綴られ、「お疲れさまでした」と結ばれていたのだ。見ていてくださった、知っていてくださったのだ、という驚きは嬉しさとなって染み入っていく。

さらにもう一つ。

はがきの隅に新聞紙上の私の部分、「奈留中学校長谷川哲朗」が切り取られて貼ってあるのだ。数ミリ、数センチの紙片はこれまた覚束ない鋏使いを思わせるものである。先の学校を異動してからは、年賀状をやり取りするばかりだったのだ。私は深く感じ入った。慈愛なるものに浸りきった。

公立学校教員を定年退職し、令和の5年間、長崎大学で教師であり続ける日々をいただいた。思い起こせば、教えられ、導かれ、助けてくださった先輩方があり、励ましや戒めとする言葉たちがある。この出来事は、出合いをいただいたお人や刻み込んだ言葉と共に、教師である私を心の奥深いところで支えていたように思えてならない。

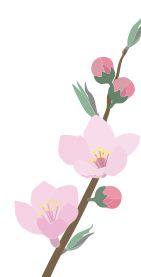
(教育学部教授 長谷川 哲朗)



目次

P1	【巻頭言】
P2,3	【実践報告】
P4,5	【現職教員の声】
P6	【県外からこんにちは！】
P6	【私も頑張っています！】
P7	【母校だより】
P8	【事業等募集、事務局から】

長谷川 哲朗
小浦 末浩, 吉川 透
吉尾 直樹, 森 亮太郎, 古瀬 光弘, 常岡 航史
笠 誠, 古賀 きらら
堀江 史佳, 西山 直輝
藤本 登



実践報告

「地域とともに歩み続ける学校」を目指して

小浦 末浩 (S61年卒・中学校)



本校は、令和 4 年・5 年度、長崎県教育委員会・長崎市教育委員会の研究指定を受け、研究主題・副主題「自分と地域の未来のために、自ら行動できる生徒の育成 ～『自己効力感』を高める地域・長崎外国語大学との交流～」の下、研究を進めてきました。今回は、横尾地区との交流、長崎外国語大学との交流、の 2 つについて述べさせていただきます。

横尾地区は地域行事が活発に行われている地域であり、今年度は地域から中学生の参加依頼が 12 件ありました。特に、今年は横尾地区が長崎市編入 50 周年を迎え、横尾連合自治会設立 50 周年記念の年でもありました。記念行事とともに前日の子どもみこしでの小学生のサポート、当日の横尾まつりでの横尾中ソーランの演舞、放送係、ブラスバンド部の演奏、書道等の作品展示など、中学生が活躍する場をいただき、地域に貢献することができました。横尾中ソーランでは、アンコールをいただくほど、大きな拍手を受け、踊っている生徒も生き生きと活躍してくれていました。その他の地域行事としては、ラジオ体操、横尾小のもちつきマラソン大会、門松づくり、鬼火だき、横尾だんじりなどがあり、生徒が活躍できるさまざまな活動があります。



しかしながら地域からの参加要請は学校の負担にもなっています。これまで地域行事には、部活動の 1 部 1 役で参加してきましたが、生徒数の減少、部活動加入生徒数の減少により、地域の要望に応えられなくなってきました。そこで研究指定を受け、どうしたらこの課題を解決できるかを職員で考え、実践してきました。それが「自己効力感」というキーワードです。単に、地域行事に参加させることを目的とするのではなく、「自分はできる。自分ならきっとやれる」という「自己効力感」を育てる「場」として、

地域行事の参加や長崎外国語大学との交流を位置づけることにしました。その結果、地域行事にも積極的に参加する部活動に入っていない生徒も増えてきました。

また、長崎外国語大学との交流も積極的に進めました。私が着任した 4 年前から留学生との交流会を企画していましたが、コロナ禍のため実現することができませんでした。そして、やっと今年の 5 月に留学生 44 人と本校 3 年生 59 人の交流会を長崎外国語大学の体育館で実施することができました。1, 2 年生が歓迎カードを作成し、3 年生がそれを手渡しました。交流会では横尾中ソーランを披露し、班別交流も大いに盛り上がりしました。英語での交流ができた生徒もいましたが、留学生は母国で日本語を学習してきており、日本語での交流になってしまったことが残念なことでもありました。その他にも、10 月には 1 年生が長崎外国語大学の施設見学と大学教授による英語研修、2 月には 2 年生が英語以外の語学研修を行う予定になっています。また、今年度は 1 年生が韓国からの留学生と、2 年生が中国からの留学生との交流を行うことができました。4 月の大学の先生による「地域の達人講話」は 3 年目を迎えましたが、世界の実情を知る良い機会となっているように感じています。



地域行事が活発な横尾地区、様々な国から留学生が来る長崎外国語大学を校区にもつことで、ありがたい交流ができています。今後とも、お互いに WinWin の関係も大事にしながら、「地域とともに歩み続ける学校」を目指して、交流を更に深めていきたいと考えております。(長崎市立横尾中学校)

本校中学部でのICT機器活用の取組

吉川 透 (H10年卒・特別支援学校)

私は、校内でGIGA担当として、中学部のICT機器活用を推進しています。中学部では、職業・家庭科の「職業分野」で「パソコン・タブレットの使い方」について学習します。そこで身に付けた力を他の学習場面で生かしていくことを目指しています。

GIGAスクール構想で生徒たちが本格的にタブレット型パソコンを使い始めたのは、令和2年度からでした。職業分野の授業では、最初は、「ネット検索の仕方」、「学校のホームページを見る」、「天気を調べる」などに取り組みました。この頃は、まだ教える側主導でした。令和3年度からは、もっと生徒たちから発信していけるようにしました。例えば、「おすすめの本紹介」では、生徒たちが好きな本をパソコンのカメラで撮影し、おすすめの一言を付けて紹介しました。活用していくことで、生徒たちは操作に対する自信が少しずつついていきました。また、カメラのQRコードを読み取る機能を活用して、いろいろな情報にアクセスすることも体験しました。これは、生徒たちの興味、関心が高く、教室に他にQRコードがないか探す生徒がいました。こうやって主体的に学習する姿勢が出てくるのだと私自身が気付かされました。

中学部の生徒たちにとっては、文字入力が課題です。ローマ字入力は、経験不足だったり、苦手意識があったりする生徒がおり、休み時間などに自分からローマ字入力に取り組む生徒もいました。タブレット型パソコンには、手書き入力や音声入力の機能があり、これらの機能を活用することで、文字入力へ積極的に取り組める生徒が増えました。音声入力は、しっかり発音しないと、入力が正しく反映さ

れないため、発音の明瞭さにもつながりました。

令和4年度は、「画像、イラスト、文字を組み合わせるポスターを作る」ことに取り組みました。ある生徒は、美術で絵を描くときに、描きたいものがすぐに決まらなかったり、構図に悩んだりして時間がかかっていました。ところが、タブレット型パソコンのアプリを使ってポスターを作ることで、アイデアがどんどん出てきて、生徒自身が操作したり、考えたりしながら表現することにつながっていきました。

次に、総合的な学習の時間の取組について紹介します。総合的な学習の時間では、「調べたことをまとめたり、表現したりする力を身に付ける」ということも目標として設定しています。生徒たちは、テーマに沿って、疑問に思ったこと、調べたこと、分かったことなどを、パソコンに入力してオリジナルレポートを作成します。教師や友達と一緒に学んだことを整理していくことで、自分の考えを形成していったり、新たな疑問が出たりすることにつながりました。このこともICT機器活用の効果だと感じました。現在は、国語、数学、社会、理科など他教科でも活用場面が広がり、生徒の新たな学びにつながっています。

ICT機器の活用は、他校の実践例や新しい情報を知るなどの情報収集も大切です。日々、試行錯誤しながら取り組んでいます。同僚の先生方と話したり、機器の使い方で分からないことは調べたりします。本校の先生たちは、ICT機器に明るい方が多く、同僚の先生方とのやり取りから、新しいアイデアが浮かぶこともあり、私にとって刺激となっています。

本校では、小学部、高等部でもICT機器活用に取り組んでいます。今後も、各部のGIGA担当と協力しながら、学校としてICT機器活用の取組を広げて、新たな実践に挑戦していきます。

(教育学部附属特別支援学校)



現職教員の声

「教員になりたいと決意した瞬間」

吉尾 直樹 (S62年卒・中学校)

教員になるつもりはまったくなく、ジャーナリストを目指して大学院への進学準備を進めていた大学4年の5月。母校でもある附属中学校の教育実習に臨んだ私は、とてもドキドキしていました。生徒時代には教育実習の先生の授業では難しい質問をして困らせようなどと考えていたので、立場が変わって生徒たちからどんな厳しい洗礼を受けるのだろうと思っていたのです。

初めての授業では緊張で細案を読むばかりで、5月にも関わらず、カッターシャツまでびしょりと汗で濡れてしまったことを思い出します。しかし、実習が進むにつれ、学級の子どもの素直な言動や未熟な私の授業を助けようとしてくれる姿に感動し、実習の最終日には、子どもたちが帰った後の教室の机一つひとつを拭きながら顔を思い出しているうちに涙がこぼれてきて、教員になりたいと強く感じたのです。

それから幸運にも教員になることができ、37年の教職人生で還暦という節目を迎えることになりましたが、あの3年4組の子たちとの出会いがなければどんな人生になっていたのだろうと、奇跡のような出会いに感謝しています。

教員になってから4年目には、附属中学校で働く

機会をいただき、実習生に教員になりたいという思いを持ってほしいと考えながら、指導にあたりました。また、学級の生徒には君たちとの出会いが人の一生に関わることがあるという話をしてきました。その後、管理職を20年務めさせていただきましたが、実習生を「実習の先生」と呼ぶことと後輩の先生として大切にすることを心がけてきました。そして二度の離島勤務で、大学時代のサークル「僻地教育研究会」で出会った素直な子どもたちと附属中の生徒たちと同じ姿に再び出会い、「僻地教育は教育の原点である」という言葉を思い出し、長崎県が離島を多く持つことは、教員が初心に帰る機会を提供してくれるチャンスなのだと実感したところです。

現在、前任校の平戸大島中から現任校の鳴北中の6年間、「ふるさと・キャリア教育」に取り組み、ふるさと長崎を大切に思い、長崎を支えようという人を育てるとともに、県外に出たとしても心のふるさと長崎を大事に思う心情を培いたいと考えています。そして、長崎で教員になりたいという人が増えてほしいと強く願っています。だからこそ、長崎大学教育学部が果たすべき役割はとても重要だと考えます。教育実習や蓄積型体験学習を通して、教員になりたいという学生が増えるように私も頑張ります。

管理職員として

森 亮太郎 (H8年卒・小学校)

新任教頭として佐世保市へ赴任して9か月。まさに怒涛の日々を過ごして今があります。一人称が「森先生」から「教頭先生」となったことにも、ようやく慣れてきたところです。日々職員室の先生方と向き合い、子どもたちとも理科の授業や朝の立哨指導で触れ合う中で、その笑顔や素直な反応を楽しみながら毎日を過ごしています。管理職員として日々新しいことを経験しながら、私なりに考えてきたことを紹介させていただきます。

佐世保市への勤務経験がなかった私にとって、初めての教頭職、一番手強かったのは、学校のことが全く分からない、予測が立たないことでした。職員の顔や名前・年齢も分からない、役職も理解できない、佐世保市独特のシステムも理解できない中、様々な書類作成や、校務計画の作成、職員の疑問質問に回答することは非常に困難でした。学校を知ること、職員を知ることが一番大切と考え、その理解に取り組みしました。教頭は「職員室の担任」とはよく言ったもので、たくさんの職員とのコミュニケーションを続ける中で、名前を覚え、その性格や特徴、人柄を理解できるようになっていくと、自分がやらないといけないこと、職員が求めていることが明確になってきました。と同時に、学校に出勤するのが楽しくなってきたのもこの頃だと記憶しています。

授業改善や生徒指導、校務の精選、ICT活用、働き方改革の実施など課題山積の現在の学校現場。先生方もベテランから大学卒の若手まで多種多様な中で、全員が学校現場で懸命に働いています。試行錯誤を繰り返しながら、毎日子どもたちと向き合っている先生方を支えるのが私の仕事です。職員室の会話や週案の記述、毎日の授業観察を続けていくと、その成果が見て取れます。先生方の努力・取組を称賛し、子どもたちの成長の喜びを共有していくことを心がけています。失敗や反省することがあったとしても、一緒に改善策を考え、明日の指導に活かせるようにしていきたいと考え、取り組んでいるところです。

まだまだ管理職としては未熟な部分の多い私ですが、何とかやっていけているのは校長先生をはじめとした職員室の先生方のおかげです。その感謝を忘れず、担任として専科として日々奮闘する先生方を支えることができるよう誠心誠意を心がけ、これからも精進していきます。



私に取り組んできたこと

近年、学校現場では、「働き方改革」「部活動の地域移行」「ICT教育の推進」など目まぐるしい変化が起きています。教職についてから、これまで日々無我夢中でやってきましたが、気がつけば、ベテランと言われる年齢です。これまで教務主任や研究主任など、学校運営に中心的に関わる機会も増え、若手教員の指導など、職員の資質向上に関する仕事にも関わっています。最近では、研修会や研究発表会に参加すると、教え子が教師として活躍している姿が見られるようになってきました。若手の教師が精一杯、熱意ある研究授業を実践している姿にこちらも刺激を受け、身が引き締まる思いです。

現勤校では今年度から、県からの研究指定を受け、私は研究主任として「ふるさと教育」についての取り組みを行っています。小中高が連携した「ふるさと学」の実践をするために、他校種の先生方との推進協議会も定期的に行い、「ふるさと学」の視点に立って地域の方の協力を得ながら日々実践を重ねています。

これまでの教員生活において私が第一に頑張ってきたことは、やはり数学科教育の理論と実践でした。日々の教材研究、小中高のつながりを意識した授業展開、その改善を真摯に現場で取り組んできました。

古瀬 光弘 (H8年卒・中学校)



そしてさらにそれを深めたいという思いから、長崎大学大学院に進み、研究を行ってきました。修了後も、定期的に大学での勉強会に参加させていただき、大学教員、小、中、高等学校教員、大学院生、学部生などの様々な立場の先生方や学生と、数学教育に関する学習を行うことができたのは、今でも貴重な財産となっており、教員生活が続ける上での自信に繋がっています。今後は、その経験を、若い先生方に伝えることが自分の役目だと考えています。

数学は、普遍的なものでありますが、その学習方法や学び方は時代とともに変わってきています。特に最近はICT機器を活用して、動点や立体を視覚的に見せて説明をすることができるので、頭の中でイメージすることが苦手な生徒でも直観的にイメージをつけることが可能になってきました。変化の激しい社会状況の中で、学校現場では学び方も「個別最適な学び」を意識するなど、常に新しいことが求められています。これまでの実践と経験を生かしつつ、私自身も学ぶ姿勢を常に持ちながら、これからも頑張っていきたいと思っています。

模索し続けた教職一年目

「先生」と呼ばれることが当たり前になり、9か月が経ちました。私は、今年度から先生として働き始めました。初任者として、5年生の担任として、一年間模索し続けながら子どもたちと向き合ってきました。教職一年目に私に取り組んだこと、学んだことを紹介したいと思います。

この一年間は、すべてのことが自分の学びとなりました。何もかもが初めてのことで、子どもたちに教えてもらいながら生活も学習も進めていきました。自分が分からないことだらけで、子どもたちには不安な思いをさせてしまったこともあるかもしれませんが、しかし、先生を助けるという経験は子どもたちにとっても良い学びになったのではないかと一年間の成長を見て感じています。

また、不登校の児童から学ぶことも多くありました。一学期が始まり1か月ほどで学級に入れなくなり、登校しても保健室や校長室に登校することがほとんどでした。学習の機会も保障できない中で、リモートで授業を行ったり、空き時間で指導を行ったりするなど周りの協力を得ながら対応をしていきました。二学期からは今までのことがなかったかのように教室で過ごすことができました。子どもは自分の思い通りにはできないと感じるのと同時に、やりがいも感じることができました。

常岡 航史 (R5年卒・小学校)



このように実際の教育現場は思っていた以上に難しく、日々学ぶことばかりです。それでも、私なりにこの一年こだわって取り組んできたこともあります。特に気を付けたことは、子どもの自尊心を傷つけるような指導はしないことです。否定から入るのではなく、言動の理由や状況を聞いてから指導するようにしました。すべてがうまくいったわけではなく、瞬間的に厳しく指導したり、大きな声で指導したりする場面もありました。指導の引き出しを増やすことで、子どもとの関わり方の幅も広がると考えています。今後も指導のやり方については謙虚に学び続けたいと思っています。

初任者としてたくさんの方のアドバイスをもらい、たくさん考えた一年間でした。二年目になるといっても、学年も子どもの実態も変わり、また一からのスタートといっても過言ではありません。不安はまだありますが、担任している子どもたちを無事に次の学年に送り出すとともに、来年度を意識した生活面の手立てや、授業での手立てを学んでいきたいと思っています。また、子どもたちが楽しく一年間を終えることができるように、できることを全力で取り組んでいきます。

県外から、こんにちは！

授業づくりを楽しむ

長崎大学を卒業して44年になります。6年生担任や管理職の頃は、修学旅行の引率でかなり長崎へいきました。その時は、意気揚々と子どもたちに長崎の歴史や平和への思いなどについて熱く語ってきました。

現在は、久留米市教育委員会学校教育課指導主事(主に人権教育)として、現場の先生たちとの社会科や道德の授業づくりに関わっています。たまには、模擬授業や飛び入りでの授業を行っています。私の人権教育のこだわりは、ある学校で同和教育推進教員を5年間したことが土台となっています。その頃から、子どもたちの人権認識を高めるための授業はどうあるべき

笠 誠 (S55年卒・市教委)



か、仲間とともに研究していました。その学びを生かして現在、校内研修に赴き、歴史の授業や人権に関する教材を用いての授業などを研究し、現場の先生たちと共に授業づくりの楽しさを味わっています。一緒に創りあげた授業で、子どもたちの「考える姿」や「わかったと実感する姿」が観れたときは、何とも言えぬ授業の醍醐味を感じます。先生たちの「やってよかった。」「いい学びになりました。」という言葉が何よりの励みになっています。(福岡県)

よいクラスってなんだろう

「よいクラスとはどんなクラスですか？」みなさんはこの問いになんと答えますか？ 私は3年目の今、この問いに考えを巡らせています。考えるようになったきっかけは、隣のクラスの子どもの様子、先生の考え方に触れたことです。私が抱く、隣のクラスの勝手な印象は「ガチャガチャ」です。何も起きない日などないというほど、日々何かが起きています。私だったら心が折れそうだと思うのですが、このクラスをもつ先生は違います。大変だと言うけれど、いつも笑っていて、こう言うのです。「子どもって本来こういう姿だから。」と。

古賀 きらら (R2年卒・小学校)



私は、自分自身が何をもってよいクラスと捉えていたのか、考え直しました。先生の指示をみんながきちんと聞くことができるのがよいクラスなのでしょうか。子どもがみんな落ち着いているクラスがよいクラスなのでしょうか。みなさんはどう考えますか。答えはまだ見つかっていませんが、よいクラスを自分がつくる、のではなく、子どもたちの本来の姿を生かしながら、1年をかけて子どもたちと一緒に、よいクラスをつくりあげる先生になりたいです。先生って本当に難しいけれど、今ちょっぴり面白いです。(佐賀県)

私も頑張っています！

堀江 史佳 (H5年卒・市役所)

長崎大学を卒業後、大村市役所に入庁し、現在は大村市にあるミライオン図書館に勤務しています。こちらは、長崎県と大村市が共同運営をしている図書館で、私は市職員として、運営に携わっています。

収蔵能力は202万冊、九州では最大規模の図書館で、書籍はもちろん、新聞、雑誌(バックナンバーも保存)、視聴覚資料など多様な資料を所蔵しています。国内に住所がある人はどなたでも利用登録ができ、資料は50点まで、22日間貸出することができます。

また、他館の資料を取り寄せたり、蔵書やデータペー

スなどを使って調べもののお手伝いをするサービス、ミライオンで借りた資料を県内市町の図書館を通して返却できるサービスなども提供しています(詳しくはウェブで→ミライオン図書館 <https://miraionlibrary.jp>)。



読書を楽しむだけではなく、日々の暮らしや仕事をする中で、お役に立てることがあるかもしれません。「もっと知りたい!」を支える知の拠点として、本学ゆかりの皆さまにも、ミライオンを知っていただき、訪れていただき、大いに活用していただきたいと思います。機会がありましたら、ぜひお立ち寄りください。

西山 直輝 (H19年卒・民間企業)

情報文化教育課程情報メディアコースから大学院教育学研究科を修了し、民間企業へ就職し、情報セキュリティを主としたシステムエンジニアをしていました。

セキュリティの道へ進んだのは、在学中に安易な設定でネットワークに接続してしまっていたサーバが、悪意がある何者かに攻撃されてしまったことがきっかけです。原因と対策を色々と深掘りしたことで、セキュリティに興味を沸き、仕事として主とする選択をしました。潜在するリスクを特定し重要度に応じ対策を講じること、シンプルではあるが難しく、やり甲斐があります。皆様の安心安全のため、デジタル社会を陰な

がら守っておりました。

昨年度からは、セキュリティの専門職からは離れ、これまで得たスキルを生かし魅力ある地域創りを推進するプロジェクトに参画しています。少子高齢化による労働者不足や需要減少、経済の衰退など、今後懸念されるマイナスの循環を、デジタル技術を活用し阻止することが仕事です。難しい課題ではありますが、出来ることから実践していこうと思っています。皆様の益々のご活躍もお祈り申し上げます。



母校だより

教育学部長 藤本 登

全国学校給食甲子園をご存じだろうか。今年で18回目を迎える学校給食に関する全国大会で、学校給食に携わっている全国の栄養教諭、学校栄養職員、調理員がチームで参加するもので、学校給食で提供されている郷土を代表する料理を競う大会を通じ、食育を啓発することと地産地消の奨励を目的として開催されています。コロナ前までは参加校が2,000校を超えていましたが、本年度の参加校は1,079校であり、本県からも58校が参加しています。その中で附属小学校が4次審査をパスし、12月10日の決勝大会に12校の一つとして出場しました。栄養教諭の山崎美奈先生が考えた献立（雲仙こぶ高菜ごはん、牛乳、長崎県産鶏の照り焼き、大村湾ぐると含め煮、唐人菜と長崎赤かぶのみそ汁、伊木力みかん）を、制限時間60分の中で調理員の川元美由紀さんと一糸乱れず調理しました。結果は優秀賞と調理員特別賞という素晴らしい成績でした。詳しくは、「全国学校給食甲子園」でネット検索をしてください。実は以前の附属小学校の給食は、調理員の確保もままならず、栄養教諭の先生が毎日調理場に立つという状況でした。それを附属学校、学部、大学本部が協議を行い、令和4年度から外部委託方式に変更しました。今では、給食を通したクロスカリキュラムが実現し、今まで以上に児童も職員も協力を頂いている地域の方々も笑顔あふれる学校になっています。

伝統野菜や食育つながりでもう一つ。中学校技術・家庭科では、技術分野で生物育成に関する技術を家庭分野で食生活を扱っています。生物育成を担当している鎌田英一郎准教授は元小学校教諭のコムギの研究者ですが、長崎の伝統野菜や高糖度トマトを題材とした公開講座も担当する等、精力的に活動をしています。年末には技術専攻恒例のもちつきを留学生とともに行うなど、胃も脳も心も捉えて離さない取組みは、学部の可能性や発展に大いに期待を持てるところです。また及川大地准教授は食品科学の研究者で、ツバキ油が皮膚や肝臓の脂質代謝に与える影響などを研究しています。10月26日には長崎市

立外海黒崎小学校の4～6年生24名が来学し、児童が考案した食事を大学食堂が限定販売しているものを食べ、及川先生の食育の講義などを受けました。これも窓口となってコーディネートをして下さった高橋浩二准教授をはじめ関係者の協働の賜物で、学部の新たな動きを感じさせます。

さて、今年の3月に締結したへき地・離島・小規模校教育の発展に寄与するための4大学間連携協定（北海道教育大学、鹿児島大学、琉球大学と本学）は、各大学の取組み状況の把握と今後の可能性について大学間で共通認識が図られました。特に、その後に行われた県内の離島地域の教員を対象とした意識調査からは、教員養成における少人数教育や離島の学校での実習の必要性が明らかにされました。一方で本学部生の離島実習（蓄積型体験学習の選択実習）や複式教育論などの離島教育関連科目の履修状況と成績との関係性からは、現在の自由選択制から系統性を重視した履修制度への移行の必要性が明らかにされました。学部の特色ある教育課程作りの一つの方策として、現在検討中です。また6月14日に九州電力長崎支店と締結した「カーボンニュートラル分野における包括的連携協力に関する協定」は、大学が目指すプラネタリーヘルスのうち、グローバルリスクやグローバルエコロジーに寄与する教育研究活動であり、気候変動対策・持続可能な社会づくりのためにも充実した取組みを行うことが必要です。

この他にも、学部・大学院・附属学校でユニークな取組みが数多く行われており、また折を見て紹介をしたいと思います。なお、この3月には長谷川哲朗、野中光治、高野厚子、中山八重子、堀井健一教授が本学を去られます。県との交流人事等で去られる方と合わせ、引き続き本学への支援をお願いするとともに、感謝の念を記し、今後のご多幸を祈念します。



©「全国学校給食甲子園」



技術専攻のもちつき

事務局だより

事業等の募集

本会は、公益目的事業として、長崎県内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校に対する図書購入の助成、及び長崎県内の児童・青少年育成を目的とする事業への助成を行っています。

【学校図書購入費助成事業】

1. 助成校：本県内、小・中・高・特支の各学校
2. 助成額：1校につき5万円未満（5件程度）
3. 募集期間：令和6年3月1日～6月30日
4. 応募手続き

- （1）助成希望学校は本会事務局へ連絡
- （2）希望校へ募集要項を送付
- （3）希望校は申込書及び購入図書計画書を提出
- （4）選考後、決定通知を送付

※応募先（本会事務局）

Email : inf@tamazono.net

Tel.&Fax. 095-824-5494

【児童・青少年健全育成助成事業】

1. 対象事業
 - （1）児童及び青少年が参加して行う体験活動・発表会・展示会・伝統文化継承・社会貢献等の実践活動
 - （2）健全育成を目的として実施する、保護者・地域の指導者等の研修、学習活動
2. 助成額：1件当たり5万円を上限として、総額20万円の範囲内で、対象とする事業の必要経費の概ね1/2を限度
3. 募集期間：令和6年4月1日～6月30日
4. 応募手続き

- （1）助成希望団体は事務局へ連絡
- （2）希望団体へ、募集要項を送付
- （3）希望団体は、申込書及び実施計画書を提出
- （4）選考後、決定通知を送付

※応募先（本会事務局）

学校図書購入費助成と同じ

訃報

玉園同窓会 前会長の濱崎嘉一郎先生が、昨年10月にご逝去なされました。

本会の発展に長い間ご尽力いただいたことに感謝し、衷心よりご冥福をお祈りいたします。

お知らせ

ともに、終身会員として

今年3月でご勇退される同窓会員の皆様、永きにわたるご貢献、本当にご苦勞様でした。本同窓会では、退職後も終身会員として、本会の進展にご支援いただければと思っています。

終身会員にご登録いただきますと、年間2回発行する会報「たまぞの」をお送りするとともに、母校の情報をお伝えしたりいたします。

ぜひ、終身会員へご登録ください。よろしく願います。

※終身会費5,000円（登録時1回のみ）

支払いは郵便払込でお願いします。

下記まで用紙をご請求ください。

Email: inf@tamazono.net

Tel.&Fax. 095-824-5494

お詫びと訂正

会報第150号の3ページ、「私が教員になった頃」のコーナーに投稿していただいた園田先生のお名前の漢字に誤りがありました。お詫びして下記のように訂正いたします。

誤 園田 貴美子 → 正 園田 喜美子（敬称略）

玉園同窓会ホームページ

<https://tamazono.net/>

玉園同窓会

YouTubeチャンネル



事務局へのご連絡

- ・電子メール：inf@tamazono.net（常時）
- ・電話：095-824-5494（以下の時間帯）
曜日：火曜日、水曜日、金曜日
時間：10時～15時

※不定期にお休みすることがあります。

題字：青嶋秋男